

第三一回大会に参加して

古賀倫嗣

愛知大学が事務局をお引き受けしていたことから、今次大会から新入会員でありながら大会印象記執筆の大役を仰せつかることとなった。何分、ムラについては無学同然の新参者であつてはその任務をよく果しうるものではないが、大会での発表を私の感想も混じえてまとめさせていただくことでその責を塞ぎたい。

第三一回大会は、茨城県の最北西部、久慈川と緑の自然につつまれた大子町において開催された。会場のある大子温泉郷は「美人をつくる温泉」としても有名だそりで、婦人会員のなかには来るのが遅過ぎたと後悔された方もおられたかもしれない。十月とはいえ、冷涼な気候のなか熱心な学習が行なわれ、また泊り込みという村研独特の大会形式は、初参加の私にとって全てが驚きの連続であり、特に懇親会及び延長戦における会員諸氏の旺盛な研究意欲と丁丁発

止の議論には圧倒させられた。九大大学院時代、恩師の内藤莞爾先生からよく「村研とは恐いところだぞ」ときかされたものであったが、恐さの一端はこんなところにもあったようである。

さて、「恐い村研」にもかかわらず、今大会の特徴は若い世代の活躍であった。自由報告八本のうち実に五本（共同報告一本を含む）もが大学院に在籍する研究者によって行なわれたことは、昨年第三〇回記念大会がいれば「村研創設世代」のデモンストレーションとすれば、今回は若い世代のそれといえるだろう。しかも、かかる諸氏の発表がきわめて正統的な方法によるムラ把握に立脚し、かつきわめて現代的な問題意識（＝農政批判）に支えられていることをみれば、こうした傾向は一層強まることを予想させる。「農村社会学」はいまだ健在のようである。

続いて、報告の中味について述べよう。

第一日午前の部、長谷部弘氏は、入り組み支配の実態を時代を追って丹念に把握され、問題は生産関係としてのムラの分化、土地・ムラ・イエの分解にあると指摘された。鷹田和喜三氏の報告は、北海道の開拓ムラ（音更町）とその母村（岐阜県美濃市）における講集団の展開を比較文化的に論じた。フロアからはムラ類型の上で秋葉講型と真宗報恩講型の区別が重要で、後者は特有の組織化過程をもつとの指摘があり、また母村では消失した慣行が開拓ムラに残存している事例などが報告者により紹介された。小内透氏は、北海道北斗農場における生産形態の創造過程を、共同経営という社会的形態を基底にした生活の営みとして捉え、北斗農場は決して例外ではなく一般のムラと同様農政の一定の規制を受けつつその上で創造的過程をみていることを力説された。「誓約集団」としての第一世代

から次世代への交代がはらむ緊張が捉えられたといえよう。高橋満氏は、農政とりわけ「生産調整」政策がどのようなように浸透しているか、そのなかで「村落」がいかなる機能を果たしたのかと問われた。生産力の高まりにより農民諸層の分化が顕在し、出荷組合内の動揺として現象、さらに再編を迫られていると報告された。

午後の部、松田苑子氏は畜産・園芸の導入により農家内余剰労働力の再吸収をはかる岩手県事例により、それが農作業分業の世代別固定化をもたらし、世代交代の遅延を結果していると論じた。浅野慎一氏は、農民出稼ぎと村落社会の関連を出稼ぎ者自身の生活の再生産を基底においた村落再編の主体的営みと捉えることにより、既存の出稼ぎ研究の弱点を超越しうると述べられた。氏の報告については「地域」とは一体何なのかという疑問を感じた。労働市場の地域性という時、どういう領域を実体的な地域とみなすべきであろうかということである。いうまでもなく資本の論理は「地域」を飛び越えつつ同時にそれを包摂する運動だからである。続く西尾純子氏は、兼業化の進展のなかでイエ的なものの残存に対してムラ的な結合とりわけ生活協働関係は大きく弛緩するものの受委託関係と生産組合が農民の主体的論理に基く新しい協働関係として現われていると報告された。変化したものとしなかつたもの、しえなかつたものという区別とは別に、どういふ条件の時にそう現象するか、それは何故なのかというさらに突込んだ分析を期待したい。北原淳・材木和雄両氏の共同報告は、畑作地帯の兼業農家が個別に兼業化に対しどう対応しているかを、家族員の労働力配置を中心とした生活設計に注目して論じた。そして世帯主とあととり層との世代間分業がイエ的結合の存続として捉えられた。

二日目、課題報告の部では、まず高橋明善・柄沢行雄両氏が、主要には山形県藤島町と新潟県豊浦町の集落調査に基いて、桎梏につきあつた小自作農制が地域農政の絡みのなかでイエ的結合IIイエ内分業をなんとか維持しながらも、新しい経営的態度を摸索している姿が報告された。特に対象村落が思想的に異質のムラ(柳田学・農本主義・共産党町政)であつたことが、地域農政に対するムラとしての対応を多元的に現象させることとなつたと述べられたのは興味深い。農政の受皿としての村落の性格如何はきわめて重要な問題であり農政の「成功」事例を一般化するわけにはいかないからである。不破和彦氏の報告は、地域農政が掲げる「新しい村づくり」の推進のために行政側から集落の役割が期待されている現実を、福島県霊山町を事例に捉え、同じムラに居住しながら土地を所有したままの離農農家の増加と農業の担い手たる中核農家の育成・増加という内部の緊張関係を取り出された。両者間の農用地利用増進II合意形成という政策課題を担う枠組としてムラの政策的再編があり、その限りでの「民主的」利用であると述べた。

特別報告の磯辺俊彦氏は「豊原村」の考察を踏まえ、農民層の土地所有の私的性格の強まりがそのまま土地所有の集団的性格の後退につながらない小農的土地所有の展開過程を指摘し、労働が所有を規定する論理が逆に所有が労働を規定する転倒形態として現象するなかで労働力と土地の正常な商品化過程を意味する「労働力の自立」が課題となつていと述べた。

全体討論ではまず司会の細谷昂氏から、(1)農政自体の問題、すなわち経済合理主義の追求・官僚統制・政治支配の緊張関係、(2)現在行政がつかもつてしている「ムラ」とは何か、(3)農民の農政に対す

る対応如何、(4)農政と村落の展望、の四点に整理がなされた後、討論に入った。安原茂氏からは、両課題報告において柳田学の影響とすることが指摘されていたがどういうレベルでどんな意味において柳田学が現われているのか、また補助金の受入れについての個々の村落の対応はどうかなどの質問がなされた。島崎稔氏によつても、小農成立の基盤としてのムラとはどういふことなのか、兼業農家を包摂しているムラも実は包摂とみせかけながら排除していく、つまり近代システムとして再編された「地域」なのではないかといった問題提起がなされた。今回は、共通課題「農政と村落」の第一年度であり、時間の制約もあつて、討論も十分に掘り下げたものとはならなかつたが、来年度大会での議論の深化を期待したい。最後にまとめとして、高橋正郎氏によつて、①農政がなぜ集落を捉えなければならなくなつたかを基本的におさえること、②その把握のメカニズムにおける矛盾・葛藤をよりリアルに捉えること、③ムラと農政の関係の論理のなかでの主体的な組替え論争等の論点に集約された。「農政と村落」という共通課題を掲げた今大会であつたが、農政のあまりにも急激かつ柔軟な変化のなかでいわば幻惑され、その本質に迫ろうとする熱意は十分感じられるもの何かしら隔靴搔痒の感を受けざるをえなかつた。また、「農民的主体的対応」とか「主体」とかいう言葉がよく使われ、これは社会学における「変革主体形成論」とも関連するものであるが、一体誰に対してどういふ意味で「主体」的なのかが問われることなくムード的に使用されているように思われた。そして、茨城大学のご尽力により大会会場にて上映された映画「栄ゆく村」に暗示されたごとく、「主体」なるものもすでに体制に掠め取られ支配枠組の補完物として現われている

のではないかと、いう危惧を感じさせ、私は暗然たる気持ちで帰路に
ついた。